

⑤ エリック・シュローサー、
チャールズ・ウィルソン 著 宇丹貴代美 訳
『おいしいハンバーガーのこわい話』

(草思社)

著者は「食事とは、急いで済ませて、あとはすぐに忘れていいというものではない」と警告しています。ファストフードの問題は肥満だけではなく、他にも隠された問題があると。例えば、人々を結びつける文化的な行為としての食が脅かされているということです。ファストフードや清涼飲料、添加物の全くない生活に戻ることは難しいですが、便利さの裏をよく知り、それとうまく付き合っていくしかないのでしょうか。食について考えるのにお薦めの一冊です。

498.5-Sch (R.K.)

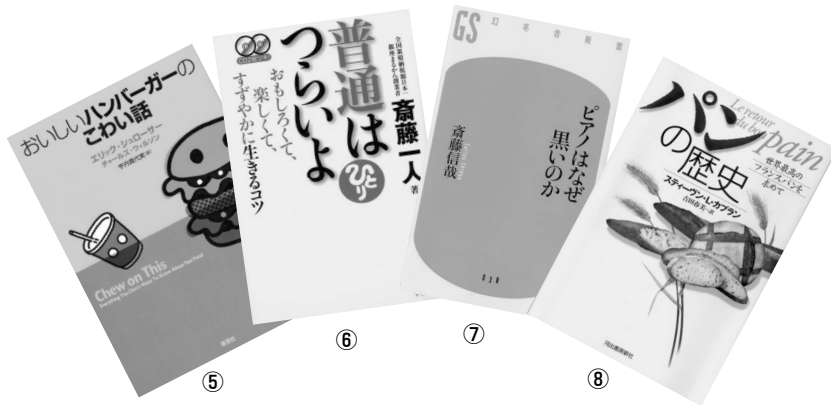
⑦ 斎藤信哉 著
『ピアノはなぜ黒いのか』

(幻冬舎)

本書では、黒いピアノが主流とか、ピアノの練習にバイエル教則本は欠かせないというのは日本だけの常識であって、欧米ではそうではないという話から始まって、ピアノの構造、ピアノの歴史、日本における音楽教育史まで大変解りやすくまとめられています。

調律師である著者は、ヨーロッパの様々なピアノの音色、響きの違いについて流石はというような解説をしています。リヒテルが日本人の村上が調律したピアノしか弾かないということ、また映画『戦場のピアニスト』の实在の主人公シュピルマンの息子と東京のショパン展で出会ったというエピソードなど紹介されていて、楽しく読めます。

763.2-Sai (F.O.)



⑥ 斎藤一人 著
『普通はつらいよ おもしろくて、
楽しくて、すずやかに生きるコツ』

(マキノ出版)

本書の著者は、全国累積納税額日本一である銀座まるかんの創業者です。しかし、お金に関することは全く書かれておらず、複雑な現代社会を楽しく生き抜くテクニックが満載されています。「普通」では考えられないご本人の不思議な体験談も多々網羅されている異色な本です。

講話集になっていますので、著者の声で録音されたCDも付いていて、読書が苦手な人でもだいじょうぶです。

とかく「普通」という言葉にとらわれ過ぎる人が多い日本人には必要な1冊だと思います。

159-Sai (N.K.)

⑧ スティーヴン・L・カプラン 著 吉田春美 訳
『パンの歴史：
世界最高のフランスパンを求めて』

(河出書房新社)

フランスにおいてパンは日本におけるお米のような存在でした。国家が国民に十分なパンを与えないことで暴動がおり、しばしばパン屋が市民の襲撃を受けることもありました。今ではすっかり私たちの生活に馴染んでいるパンですが、意外と深い歴史があります。本書ではフランスパンの歴史をたどるうち、おいしいパンの見分け方から情熱のパン職人たち、18世紀フランスの社会までも見ることができます。パンにまつわる知られざる世界を覗いてみてください。

588.32-Kap (K.K.)